

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その12 昆虫の教育音楽)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

ある文房具メーカーが学習帳の表紙に昆虫の写真を載せるのを止め話題になったことがある。子供の親ばかりでなく教師からも気持ち悪いとの声が数多く寄せられたためなのだという。一方で自然観察会に出かけてみると虫を見たり手に取ったりしてはしゃいでいる親子連れがたくさんいるのは嬉しい。

昆虫の題名の曲や可愛く表現した曲は童謡を中心にして少なくないが、科学的な側面を加えた子供向けの曲となるとどうだろうか。そのような曲を探して何枚かの海外のCDに出会えた。「SONGS ABOUT INSECTS, BUGS & SQUIGGLY THINGS」というアルバムは＜虫が好き！＞＜オオカバマダラ＞＜バッタ＞＜巣の中のハチ＞＜カマキリ＞＜蟻の行列＞等虫の生態を楽しく歌った14の小曲からなる。＜オオカバマダラ＞は「トウワタに産まれた卵からふ化した幼虫が葉っぱを食べながら脱皮を重ねて蛹になり、濡れて縮こまった翅を伸ばして成虫になること、＜巣の中のハチ＞は「ハチには働き蜂とオスのハチと一頭の女王蜂がいて、働き蜂がもっぱら働き、オスは生殖、女王は産卵が役割であること、巣の中で子育てをし、翅を動かして巣の中の温度を下げる」ことを歌う。KIMBO EDUCATIONALという会社名からも教育用の音楽だと知れる。

「Insects and spiders」というアルバムは可愛い女の子が虫眼鏡で虫の観察をしているジャケットで、「草競馬」や「幸せなら手をたたこう」などのメロディに乗せて昆虫の体の構造や昆虫とクモの違い等が歌われる。4～9歳用で、「SCIENCE SERIES: MUSIC MAKES LEARNING FUN!」と表記されている。

同じような発想で作られた日本の曲を探していて「蟲けら」という4人のグループが演奏する《昆虫音頭》を見つけた。モンシロチョウ、カブトムシ、ツクツクホウシ、ウマオイ、オオカマキリ、エンマコオロギの順でユーモラスに歌われる。

一番の歌詞を見てみよう。

へヒラ〜リヒラヒラモンシロチョウ

キャベツ畑で目を覚まし〜

紋付き袴で決め込んで〜

風の吹くまま旅に出る〜

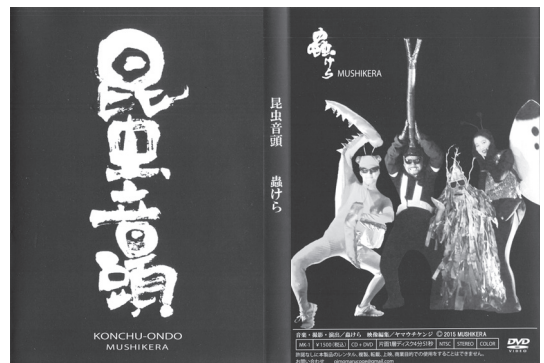
ヒラ〜リヒラヒラモンシロチョウ

春を運ぶ〜

新たに発売されたDVDやインターネットで観るとグループの4人がモンシロチョウ、カブトムシ、ミノムシ、カマキリに扮し歌いながら踊るのが楽しい。

昔昆虫採集をした雑木林や原っぱや池等が姿を消したばかりか、社会の変化により子供たちが昆虫と出会う機会は減ってしまった。しかし「昆虫少年」は世界的にほとんど日本だけの存在で、昆虫に触れる機会が減った今でも日本の子供には虫好きの血が流れていると梅谷猷二氏は著書「虫けら賛歌」の中で指摘している。

「蟲けら」は自分たちの活動について次のように記している。「我々の生活に於いて、ややもすれば嫌われ者とされている昆虫たち。しかし、地球上もっとも繁栄し、多種多様な進化を遂げている彼らは、人類をはるかに凌駕する“成功者”だと言える。そんな彼らへのリスペクトを礎とし、この多忙な現代社会の中で失われつつある、“自然の美を愛でる心”を昆虫を通して再興していければ……」。同感である。



蟲けら 《昆虫音頭》 DVD & CD セット

NEWS

第21回農作物病虫害防除フォーラムを開催

農林水産省、植物防疫全国協議会

農林水産省植物防疫課と植物防疫全国協議会は12月9日、農林水産省本館7階講堂で、「第21回農作物病虫害防除フォーラム～今後の土壤病虫害対策を考える～」を開催した。同フォーラムは、平成7年から毎年1回開催しており、今回は土壤病虫害の防除対策を取り上げ、農研機構中央農業総合研究センターの津田新哉氏（農研機構中央農業総合研究センター上席研究員）を座長に進行。講演テーマと講演者は次の通り。

「土壤病虫害対策の現状と展望」津田新哉氏（農研機構中央農業総合研究センター上席研究員）、「転炉スラグを用いた土壌pH矯正による土壤病害の被害軽減技術」門田育生氏（農研機構東北農業研究センター上席研究員）、「分子生物学的手法を用いたセンチュウ密度と被害程度の子察」豊田剛己氏（東京農工大学大学院農学研究教授）、「ナス半身萎凋病を抑制する輪作体系の実証」池田健太郎氏（群馬県農業技術センター独立研究員）、「土壌還元消毒の消毒メカニズムと実践事例」門馬法明氏（公益財団法人園芸植物育種研究所研究員）、「次世代型土壤病害管理－ヘソディムの概要と研究普及の現状と課題－」對馬誠也氏（（国）農業環境技術研究所研究専門員）。

日本学術振興会賞を受賞、岡山県農林水産部の川口氏 根頭がんしゅ病の生物的防除法開発が評価

日本学術振興会（安西祐一郎理事長）はこのほど、同会に設置している日本学術振興会賞審査会（委員長：野依良治科学技術振興機構研究開発戦略センター長）の選考に基づき日本学術振興会賞（第12回・平成27年度）の受賞者25名を決定。今回は植物防疫分野から、岡山県農林水産部の川口章主任が「植物病害ブドウ根頭がんしゅ病の生物的防除法の開発」を受賞理由に栄えある賞を受賞した。

根頭がんしゅ病は、世界中でブドウをはじめとする果樹や農作物の生産現場において脅威となっている。川口氏は、被害の大きいブドウ根頭がんしゅ病の原因細菌の迅速で簡便な診断方法を確立するとともに、この病気に拮抗作用を有し、実用レベルの発病抑制効果を持つ菌株「ARK-1」の選抜に成功。これを用いた新しい防除技術は、国内はもとより世界中で有効であることが確認され、モモ、リンゴ、トマトなどの農作物にも有効であることがわかった。この防除機構の解明は基礎科学としても高く評価された。受賞式は2月24日、日本学士院（東京都台東区上野公園）で行われる。

賀詞交歓会を開催、経団連会館で

農薬工業会

農薬工業会（会長：平田公典日産化学工業取締役専務執行役員）は1月5日、東京都千代田区の経団連会館ホールで平成28年賀詞交歓会を開催した。

冒頭、平田会長は、我が国農業が農業従事者の高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増加などの課題を抱える中で、収量の増加や品質の確保、省力化を支える農業の重要性が再認識されていくと強調。同工業会の将来構想である『JCPA VISION 2025』では、「食料生産と農業の役割について、会員各社とその周辺、農業者・流通関係者、アカデミアを対象に情報発信を強化していく」などとあいさつした。農林水産省の瀬川雅裕農産安全管理課長の祝辞に続き、西本麗副会長（住友化学代表取締役専務執行役員）の発声で乾杯。和やかな歓談の中、栗田道郎副会長（ダウ・ケミカル日本代表取締役副社長）の中締めで、午後1時半過ぎに散会した。



年頭のあいさつを述べる平田会長

シンポジウム「病害診断を考える」を開催

日本植物防疫協会

日本植物防疫協会（上路雅子理事長）は1月14日、都内千代田区の日本教育会館一ツ橋ホールで、シンポジウム「病害診断を考える」を開催し、国及び都道府県の行政・試験研究機関や普及指導機関、農薬メーカーなどから約600名が参集した。

冒頭、上路理事長は、病虫害の発生は地域や作物、作型などにより異なり、侵入病虫害や抵抗性・耐性などの問題によりますます複雑になっていると述べた上で、「多くの指導機関で組織・体制の弱体化が進む中、本シンポジウムを通じて病虫害の診断や防除指導の新たな工夫や仕組み作りに向け、情報交換を深めていただきたい」などとあいさつした。講演テーマと講演者は次の通り。「千葉県における病虫害診断の取組－現状と課題－」牛尾進吾氏（千葉県農林総合研究センター）、「福岡県にお

ける病虫害診断の取組－現状と課題－」成山秀樹氏（福岡県農林業総合試験場）、「農薬メーカーにおける病虫害診断の実践事例」美野光哉氏（アグロカネショウ技術普及部）、「生産現場における病虫害診断の実践と課題－流通業者の取組み－」山内美佳氏（イノチオホールディングス・イノチオ農業研究所）、「教育現場における取組みと今後の展望」西尾 健氏（法政大学 植物医科学センター）、「生産現場が求める病虫害診断・防除指導」宗和弘氏（JA 全農営農販売企画部）。

総合討論では講演者に加え、農林水産省消費・安全局植物防疫課の春日井健司課長補佐がパネリストとして登壇。近藤俊夫同協会理事を座長に、会場から防除指導の現場で起きている問題や課題が提起されるなど活発な質疑応答が交わされた。



上路理事長，あいさつで開催趣旨を強調

茨城県植物防疫シンポジウムを開催

茨城県病虫害防除所，茨城県植物防疫協会

茨城県病虫害防除所（渡邊 健所長）と一般社団法人茨城県植物防疫協会（大久保太一会長理事）は1月15日、茨城県水戸市の茨城県農業共済組合連合会会議室で、第1回茨城県植物防疫シンポジウムを開催した。開会にあたり、大久保会長と渡邊所長があいさつ。同シンポジウムは、両組織の日頃の活動や取り組み、農業生産現場に果たしている役割などについて広く理解を深めてもらうことを目的に初めて企画開催したもので、生産者や農業企業、指導機関などから約100名が参集した。

講演は丸和バイオケミカル技術顧問・技術士の川島和夫氏が「展着剤を上手に使うための基礎と応用」と題して、防除現場における展着剤の活用方法を詳述。奈良県病虫害防除所所長の國本佳範氏は「ハダニ防除のための薬液付着性向上」をテーマに、効率的・効果的な農薬散布方法とその技術普及について述べた。

また事例紹介として、鹿行農林事務所行方地域農業改良普及センター専門員の皆藤昌彦氏が「イチゴのハダニ類防除における薬剤の効果的な使用方法の検討」、茨城県病虫害防除所技師の井上麻里子氏が「ナシのハダニ類に対する薬剤感受性検定結果について」を発表。茨城県

植物防疫協会の小沼健司事務局長が茨城県植物防疫協会の業務内容について説明した。



展着剤や農薬の効果的散布方法などをテーマに講演

【シンポジウム】

「国産農産物の安定生産と輸出促進に寄与する IPM」

～第8回環境保全型農業シンポジウムおよび第19回日本バイオリジカルコントロール協議会講演会の共催～
日 時：平成28年3月2日（水）

11:00 開演～18:00 閉会

会 場：東京大学伊藤国際学術研究センター

伊藤謝恩ホール 東京都文京区本郷 7-3-1

定 員：350名（先着順）

参加費：講演要旨代 3,000円 懇親会 5,000円

〈プログラム〉

11:05～基調講演「日本産農産物の輸出促進と茶の海外輸出に対応した病虫害管理体系の構築」佐藤安志氏（野菜茶業研究所金谷茶業研究拠点）/11:45～IPM事例報告「長崎県産いちごの台湾輸出に向けた防除体系確立への取り組み」平山千穂氏（長崎県病虫害防除所）/13:10～特別講演「東日本大震災復興に向けた IPM 技術の活用」～宮城県山元町太陽光利用型植物工場における事例～伊藤博祐氏（宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部）/13:50～IPM事例報告「メロンにおける黄化えそ病対策としての IPM 防除技術の取組み」中村幸生氏（アリスライフサイエンス顧問，元高知県農業技術センター果樹試験場）、「オクラでの土着天敵を活用した IPM の取り組み」田代啓一郎氏（鹿児島県南薩地域振興局）、「北部九州における露地ナス・IPM の取り組みについて」林 三徳氏（アリスライフサイエンス顧問，元福岡県農業試験場）、「リンゴ，ナシにおけるヒメボクトウ防除について」星 博綱氏（福島県農業総合センター果樹研究所）/16:05～特別講演「IPMにおける生物防除資材の利用の現状と課題」国見裕久氏（東京農工大学教授，副学長）。

（申込み）日本微生物防除剤協議会もしくは日本バイオリジカルコントロール協議会のウェブサイトからメールで。